

聞き書き 隠岐・竹島のアシカ猟

藤井弘章

はじめに

ニホンアシカは昭和三〇年（一九五五）ごろに絶滅したといわれるが、明治時代までは日本各地に生息していた海洋生物である。北海道や日本海側だけではなく、太平洋側の伊豆諸島や紀伊半島沿岸、さらには九州にも分布していた〔伊藤・中村 一九九四〕。今回の調査地である隠岐の西ノ島町では、昭和二六年（一九五一）に一頭捕獲され、昭和三五年（一九六〇）ごろまで確認されている〔伊藤・中村 一九九四〕。また、隠岐の北西に位置する竹島はニホンアシカの一大繁殖地であった。

民俗学および、周辺領域では、早くからアシカに注目していた。すでに江戸時代には、小原桃洞など紀州の本草学者が紀州日高郡・海鹿島のアシカに注目していたこともあり（『桃洞遺筆』）、南方熊楠も紀州田辺でのアシカの目撃情報などについて触れている〔南方 一九二九〕。その後、紀州ではアシカ猟に関する歴史的な研究がおこなわれた〔前田 一九九二など〕。また、伊豆諸島のアシカ猟については、地元で民俗学、歴史学的な調査をおこなってきた段木一行氏、坂口一雄、橋口尚武氏などの報告があり〔段木 一九七六、坂口 一九八〇、橋口 一九八八など〕、狩猟民俗の研究をおこなった千葉徳爾氏も関心を寄せていた〔千葉 一九七五〕。今回の調査地である隠

岐・西ノ島におけるアシカ猟については、昭和一〇年（一九三五）、桜田勝徳らによる報告が出ている（「桜田・山口 一九三五」）。その他、岩手県、石川県などでもアシカ類に関する考古学、歴史学、民俗学的な報告がみられる（「宮古市教育委員会 一九八一、左古 一九八五など」）。一方、北海道では、海獣類の狩猟に関する研究がみられる（渡部 一九九二など）。

ただし、こうした研究は個別におこなわれたものが多かった。アシカに関する総合的な研究を主導したのは、生物学などの研究者であった。とくに、中村一恵氏や、井上貴央氏などが中心となって、ニホンアシカに関する研究が近年急速に進んだ（中村 一九九二、井上・佐藤 一九九三など）。すでに絶滅した動物であるために、そのアプローチはおのずと歴史的・民俗的なものも含まれている。とくに、今回の調査地である隠岐・西ノ島では、アシカ猟に関する詳細な聞き取り調査もおこなわれており、民俗の報告としてもきわめて貴重である（井上・佐藤 一九九三）。これらの研究では、先述したような各地の研究も相当数引用されている。さらに、考古学からも、動物遺体を分析する試みがおこなわれてきている（西本 一九九五など）。

しかしながら、民俗学からなすべくこともまだ多いように思われる。アシカと直接接した方は少なくなっているものの、丹念に見ていけば伝承はまだまだ残されているようである。野本寛一氏も、徳島県鳴門海峡におけるアシカの伝承を聞いている（野本 一九九五）。筆者自身も和歌山県湯浅町、同串本町、伊豆諸島・神津島、瀬戸内海の小豆島などでアシカの伝承を聞いたことがある。今後は、伝承の聞き取りとともに、江戸時代などの文献も用いていく必要がある。絶滅した生物であるため、これに関する民俗的な研究には限界があることは事実であり、考古学、歴史学、生物学などと共同で総合的に研究をおこなう必要があるだろう。情報を共有しながら、アシカの民俗についての研究をしていく必要があると思われる。今回の調査では、実際にアシカと遊んだという人物に遭遇した。総合的な考察まではできないが、隠岐における具体的な聞き書きを報告する。

一 隠岐のアシカ猟



▲写真1 三度の集落



▲写真2 三度のトド塚

昭和三〇年代（一九六〇年ごろ）までは、隠岐にもニホンアシカは来遊していた。西ノ島南部の三度^{みたべ}では、明治から大正時代にかけて、アシカ猟がおこなわれていた。とくに、三度のアシカ猟については、昭和一〇年に、桜田勝徳と山口和雄が「トド猟」として報告している（桜田・山口 一九三五）。ただし、桜田らは、三度を訪れておらず、残念ながら実際のアシカ猟経験者から聞き取りをおこなっていない。三度のアシカ猟については、その後、さらに具

体的な内容も報告されている（井上・佐藤 一九九三）。井上氏は、明治生まれで実際にアシカを捕獲した人物や、漁業関係者からのアシカの目撃情報なども丹念に聞き取りをおこなっている。このほか、島後北端の白島でも、アシカ猟がおこなわれたというが、まとまった報告はないようである。^{（上）}

今回の調査では、三度を訪れ、アシカ猟に関する聞き取

りをおこなった。しかし、実際にアシカを捕獲した経験者はすでにおらず、捕獲については間接的な語りしか聞くことができなかった。以下は、三度の小出重治氏（昭和二年生まれ）からうかがった話である。

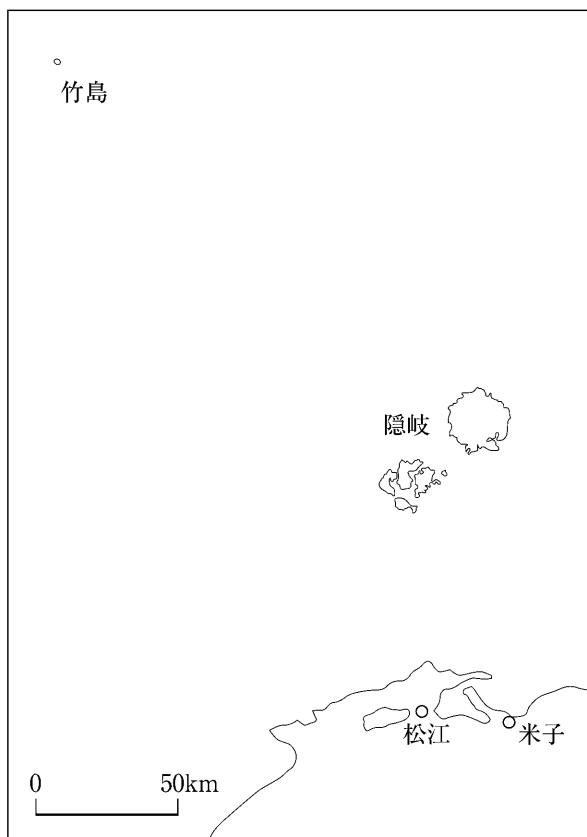
アシカのことは小さいころにもトドといっていた。

トドは見たことない。親は見たという。親は捕ったかどうかは聞いていない。北に岬がある。岬の裏側の矢走（やはし）というところに、一六、七個、海岸に穴が開いている。奥行きは深くはない。そこにトドがおったという。

網で捕ったらしい。入口に網を仕掛けて捕ったという。時期は知らない。満ち潮になると、穴がふさがる。トドという手漕ぎの小さな船で出かけた。石を積んで、船を少し沈めて穴へ入ったという。

現在では、これ以上の伝承は確認できなかった。三度に関していえば、聞き取りから井上氏らの研究を再検討することは難しいかもしれない。あとは、文献や資料などを用いての研究が必要となるが、今回はそこまでおこなっていない。

三度の地福寺境内には、アシカを祀ったトド塚がある（写真2）。年号がないため、正確な建立時期は不明であるが、井上氏は明治から大正ごろに建てられたと推測している〔井上・佐藤 一九九三〕。小出氏は、ここでアシカの供養をおこなっていたという記憶はないという。動物を供養する塚は全国に見られるが、網にかかるか漂着して死んだものを祀ったものと、食用にして供養したものとがある。ウミガメの塚はほとんどが前者であり、クジラは後者が多い。三度のトド塚は、利用したための供養という意味合いで建立されたと考えられる。



▲地図

二 竹島のアシカ猟

1 竹島について

現在、日韓の領土係争地となっている竹島は、隠岐の北西一五七キロに位置する。東西二つの島と、多くの岩礁があり、面積は約二三〇平方メートルである。平地がほとんどないため、人が居住するには適さないが、島の周辺は北と南からの海流がぶつかるため、海産物が豊かである。

江戸時代から米子の人が鬱陵島へ渡る際に立ち寄ることがあり、アワビなどとともに、アシカを捕り、アシカの油を持ち帰ることが

あった。ただし、竹島への渡航が本格化するのには明治時代になってからである。明治三八年（一九〇五）、竹島が日本の領土として編入されたのは、アシカ猟を契機としている。隠岐の中井養三郎が、竹島でのアシカ猟の安定化を図るために、国に対して竹島の日本領土編入などを願ひ出たことを受けて、政府は竹島を島根県の所管としたのであった。その後、隠岐の人々を中心に、竹島でのアシカ猟やアワビなどの採取が盛んとなった。しかし、第二次世界大戦後、昭和二十七年に韓国が李承晩ラインを設定して竹島を取り込んだ主張をし、昭和二十九年（一九五四）からは韓国軍の部隊が駐留するようになって現在に至っている。

2 八幡昭三氏

隠岐・島後北西部の海辺に久見^{くみ}という地区がある。旧暦五箇村に属していたが、現在では隠岐の島町に属している。この地区出身で在住の八幡昭三氏に竹島のアシカについてお話をうかがうことができた。昭和三年生まれの方で、ご自身は竹島には行ったことがないという。しかし、八幡氏の老家（板屋という家）は、江戸時代に竹島に渡っていた記録がある。また、明治二年生まれの父親・八幡才太郎は、五箇村の村会議員や久見の区長を勤め、戦後は竹島返還運動に取り組んできた人物であった。さらに、才太郎の弟・八幡伊三郎は、昭和八年（一九三三）から一三年（一九三八）にかけて、合計九回、竹島に渡り、アワビ漁をおこなった人物であった。このような背景から、昭三氏は、隠岐の島竹島を守る会会長を勤めるなど、竹島返還運動に熱心に取り組んできた。竹島に対する思いは熱く、自身は行かれたことがないにもかかわらず、伊三郎から聞いた話を鮮明に覚えている。昭三氏に竹島でのアシカ猟についてうかがった。さらに、隠岐に連れてこられたアシカについては、昭三氏自身が直接かわった体験をお持ちである。先述したように、日本でアシカと遊んだことのある方はもうほとんどおられないであろう。貴重な証言である。八幡氏がアシカと遊んだという話は紹介されたこともあるが〔杉原 二〇二〇〕、ごく

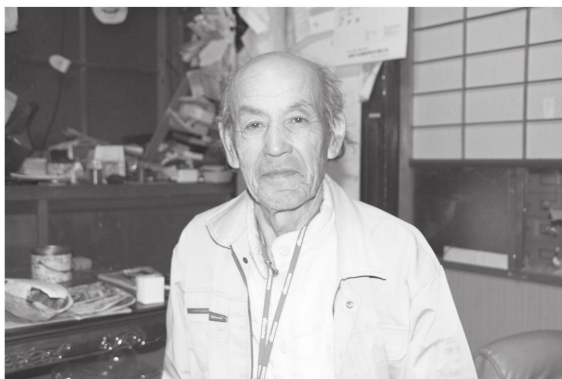
わずかな記述となっている。本稿では、できる限り忠実に引用させていただくことにする。

3 明治時代の竹島

アシカについて触れる前に、隠岐の人々の竹島とのかかわりの歴史を、八幡氏の語り、八幡氏から提供いただいた資料などをもとにしながら、概観しておきたい。



▲写真3 久見の集落



▲写真4 八幡昭三氏

明治二〇年代には、隠岐北部の旧五箇村の人々は、竹島へ渡り、アワビを採り、アシカを捕獲して、アシカの皮を持ち帰っていた。久見からも石橋松太郎が竹島に渡り、アシカの皮、アワビを持ち帰って商売にしていた。この人物は、竹島でドブクロも作っていたという。

明治三二年（一八八九）の日朝通漁規則により、日本人が朝鮮沿岸で漁業に従事できるようになったため、隠岐から鬱陵島へ渡る人が増加した。明治二〇年代後半には、朝鮮に出かけて貿易をする者

もおり、その行き帰りに竹島へ立ち寄ってアワビを採ることがあった。旧五箇村福浦の八浦屋という家であったという。以下は八幡氏の語りである。

父親より少し上の人は北朝鮮のほうまで貿易に行っていた。朝鮮の中部より北へ行く回数が多かった。風の関係で、北のほうが行きやすかったらしい。屋根に葺く杉皮をいっぱい積んで行った。帰りには、朝鮮の有名な焼き物を積んできた。ここらには値打の分かってくれる人はいなかった。泥の焼いたような、瓦みたいな屋根が多かった。弱くて雨漏りしてかなわんから、杉皮を持って行くと重宝がった。小さい船の両脇に、孟宗竹を六本つけ、両側で一二本にして行った。いくらしけても、船の中に水が入っても、竹なので沈まない。なぎになれば、船の中の水を出して、また走った。夜に、星が出るのを待って、方向を定めて走った。星を見て方向が分かるかと思つて、星を見るが自分には分らない。ヤキダマエンジンの前は孟宗竹を付けた船で行った。

明治三〇年ごろには、西郷港にアシカの皮が来るようになり、明治三十六年（一九〇三）には、隠岐で潜水漁をしていた中井養三郎（鳥取県出身）が、竹島でのアシカ猟をおこなうようになった。久見の石橋松太郎も中井に協力したが成功しなかった。この時期、竹島のアシカを捕獲しようとする人が多くなつたため、中井はアシカ猟の独占を図り、国に対して竹島の領土編入と、竹島の貸し下げ願いを提出。明治三八年（一九〇五）、竹島は島根県の帰属となつたため、アシカ猟も島根県の許可制となった。アシカ猟を願ひ出た八名のうち、島根県はアシカ猟の乱獲を防ぐため、実績のある中井ら四名に許可を出した。ただし、競争を防ぐために共同経営をおこなわせることになり、明治三八年六月、中井らによる竹島でのアシカ猟を目的とした竹島漁猟合資会社が設立された。こうして、竹島でのアシカ猟が本格的に開始されることになった。

4 昭和初期の竹島

竹島のアシカ猟については、先述したように、その歴史についての詳細な研究がある（井上 一九九四、一九九五）。井上氏の研究によると、アシカの捕獲頭数が最も多かったのは、竹島漁猟合資会社が設立された明治三八年の約二八〇〇頭であった。その後は、日露戦争終了にともなう皮革価格の暴落や、乱獲によるアシカ頭数の減少などによって、捕獲頭数は減っていく。会社は経営不振に見舞われたため、大正一三年、中井は漁業権の義名を橋岡忠重、八幡長四郎らに譲った。昭和初年には、中井による出漁もまだあったが、昭和八年（一九三三）からは橋岡が中心になって昭和一六年（一九四一）まで竹島でのアシカ猟がおこなわれた。橋岡は神戸のアシカブローカーから融資を受け、生け捕りにしたアシカを動物園に売却している。この時期は、明治時代と比べると捕獲頭数も大幅に減っている。たとえば、昭和八年には八頭、九年には一九頭、一〇年春は二九頭、一〇年秋は二〇頭となっている。橋岡らのアシカ猟は昭和一六年に終了している。

一方、久見の人々は、生活の活路を竹島に見出し、昭和二年より島根県に対して、竹島の地先権の許可を願い出した。この申請をおこなったのが八幡昭三氏の父親・才太郎であった。久見の人々の願いがかなって竹島の地先権が許可されたのは昭和四年（一九二九）のことであった。地先権とは、島の水際から五〇〇メートル以内のサザエ、アワビ、貝類、海藻を採る権利である。アシカ猟許可とは別物であった。一〇年おきに更新し、今でも久見が地先権を持っている。戦後は、漁協の組合長が代表となって申請していた。今は漁協が合併したので、水産組合を作って、その代表が申請している。竹島の地先権は久見だけが持っているという。また、昭和一〇年代後半には、久見の浜田正太郎が、竹島の鳥糞を採取して肥料とする権利を許可されている⁽²⁾。竹島に関する権利は、このようにアシカのみではなかった。

5 竹島への出漁

昭和初期に竹島へ行く様子はどのようなものであったのであろうか。以下、八幡氏の語りを紹介する。

今の竹島はランコ、リヤンコといていた。ウツリヨウトウ（鬱陵島）ともいていた。

竹島には一〇人から一五人ぐらいのグループで行った。二〇日から四〇日行った。六月ごろと、八月ごろだった。当時は無線もないので、帰ってくるまでまったく連絡が取れない。送り出す家庭は少なかった。当初は一人者が多かったが、のちに家庭を持つている者も行くようになった。行く人が少ないので、西郷、島前でも募集をした。一二、三人がなかなか集まりにくい。

竹島へ出発するとき、ここ（久見）へ寄って出発した。西郷近辺の人が多かった。福浦の港に集まった。そこに、弁天さんを祀っている。お参りをしてから、久見の港へ来て、神社のお祓いを受けて、出発した。晩の八時か九時ごろに出た。夜が明けるところに竹島に着く。帆掛け船で行った。ヤキダマになったのは大正の初めごろか。ヤキダマの三〇馬力の船で行った。七、八トンぐらいの船だった。コンパスを合わせて出発する。風や潮の流れによって変わる。ときには、どうしても竹島が見えなくて、一日じゅう探し回って、ようやく見つけたということもあった。交代交代でコンパスを見て、目を離すことはなかった。薪、米、水のほか、アシカを入れる材料、小屋を建てる杉皮、木材、竹などを積んで行った。

隠岐のなかで久見は最も竹島に近いこともあって、昭和初期には、竹島出漁の拠点となっていたことがうかがえる。

6 竹島でのアワビ・サザエ採りとアシカ猟

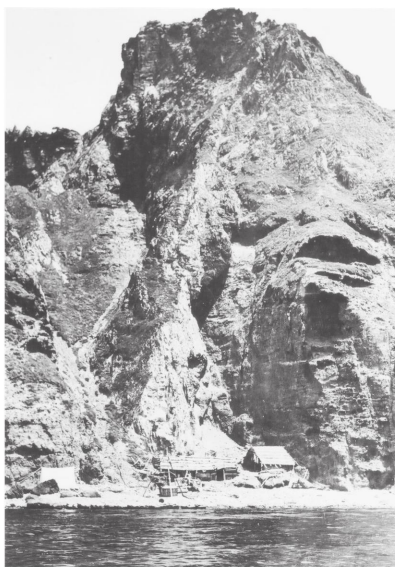
八幡氏は、おじの伊三郎から、竹島での漁撈の具体的な様子について聞いている。伊三郎はアワビ・サザエ採りの名人であったという。

竹島周辺は、三〇〇メートルくらい落ち込んでいる。一〇メートルから二〇メートルの深さのところ、三〇〇から五〇〇メートルくらい続いている。水分が急に上がってきて上を流れるので、海藻も長さが倍ぐらいある。ワカメも三メートル以上ある。貝類がものすごく繁殖している。小魚がたくさんいる。それを狙って大きな魚が来る。大きな魚を捕るうとアシカがやってくる。竹島周辺は、潮の流れが案外速い。

西の島に大きな洞窟が三つある。そのうちのひとつの洞窟の中で、水がぼたぼた落ちていて、桶を置いておく、飲み水に困らない。三〇人、四〇人の飲み水が取れた。風向きが変わると行けなくなるので、汲んできて置いて、大きな桶に入れておく。風呂にも使えた。洞窟の上にはグミの木が二、三本しかないけど水が取れた。

東の島に小屋を建てていた。薪は持って行つたが、海岸に寄っている木を焚いたりしてご飯を炊いた。米だけ持つて行くと二か月ぐらい苦にならんかったという。東の島にちよつと平らなところがある。野菜が少しは作れる。日露戦争のころには、そこに監視所があった。昭和になってからは軍人はいなかった。監視所の土台はコンクリだった。おじさんは、ここでコンクリを初めて見た。

伊三郎は昭和八年から一三年ぐらいに竹島へ行っていた。サザエ、アワビを採る専門だった。とくにアワビ。アワビを一番採ったとき、一日に二〇〇貫（七五〇キロ）採った。カンコという小さな船にアワビを載せていくと、積みすぎて、船のぎりぎりまで水がきたという。せっかく採ったので、着ていたものを脱いで、船を引っ張って泳いで、海岸まで船を引っ張ったという。畳二枚分ぐらいのソコゼに、あまりにもたくさんアワビがいる



▲写真5 竹島東島の作業小屋（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）

ので、数えたところ、一〇七個おったという。アワビの上にアワビが重なっていたという。アワビ採りをしていると、アシカがしょっちゅうやってきて、魚を追いかけて食べていたという。島が一〇〇個ぐらいある。アシカはあっちこっちで遊んでいる。

採れないときには、アシカ捕りの手伝いをした。風の太いときなどはアシカ捕りの手伝いをした。アワビ、サザエ採りは一人か二人。アシカ捕りは一、二人。アシカ捕りは追い込む人もいる。網を引く人もいる。アワビ、サザエ採りは難しいのと、あんまりよけい採りすぎても、塩漬けして加工してから持って帰ることになるため。朝鮮の海女を四、五人頼んでいた。アワビ、サザエを採ろうと連れてきた。たいがい済州島から来た。船頭が一人で運んできた。

伊三郎は、あくまでアワビ・サザエ採りのために竹島に出かけていた。アシカ猟のグループと一緒に出かけていたということであろう。アシカ猟のための人員がほとんどで、アワビなどを採る者は限られていたという^③。しかし、伊三郎もアシカ捕獲の手伝いすることもあったという。アシカ捕獲と地先権による貝類や海藻の採取とは、権利は異なるが、久見の人々の間で、助け合いながらおこなっていたということであろうか。写真5は竹島の小屋である。断崖



▲写真6 アシカ猟か（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）

絶壁の孤島であるが、海岸に小屋を建てて暮らしていた様子がうかがえる。

伊三郎は、竹島の瀬の場所などを克明に覚えていた。昭和五年（一九八〇）ごろ、当時を思い出しながら竹島の地図を描いたのが図1である。航空写真や地形図などからは分らない情報があふれている。貴重な記録である。伊三郎は、アシカ捕りの専門ではなかったが、竹島のアシカについても見ていた。

西の島の大きな洞窟のうち、一つはアシカがお産をする洞窟だった。ほかではアシカのお産は見たことがない。この洞窟でしかお産をしなかった。お産のときには血も流れるので、イルカなんか血の匂いでつけてきて、赤ちゃんが捕られる可能性が高いから、洞窟で産んだ。生まれて二晩ぐらいすると、穴から連れ出してくる。入口ではアシカが警戒している。お産のところに洞窟の入口で網を張っておくと、赤ちゃんを連れて出てくるので、簡単に捕れる。生まれたばかりなので、親と一緒にしとかんといけない。洞窟の前に、晩に網を張っておき、朝早くから追い出して網を上げて捕った。一日平均、一頭ぐらいしか捕れない。簡単に捕れるが、お産のときにはあまり捕らなかつたという。この洞窟には普段はアシカは入っていない。

西の島の横に、平らな島がある。そこにアシカがいっぱい休んでいた。せぎ落とされるアシカもいた。大きなアシカは銃で撃った。網を張って追い回すこともあった。網に入ると上げる。海の中では泳ぐのが速い



▲写真7 アシカ猟か（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）



▲写真8 アシカ猟か（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）

ので、捕まえるのは難しかったという。思うようにならないといっていた。

伊三郎の体験から、アシカは網での捕獲と銃での捕獲があったことがうかがえる。これを裏付ける資料として、昭和九年に撮影された一連の写真がある。写真11は、中渡瀬仁助が銃を構えている。中渡瀬仁助とは、明治三六年に中井養三郎がアシカ猟をおこなうようになって以来の猟師で、アシカ猟の権利が中井から橋岡忠重に移ったあと、アシカ猟をおこなっている。竹島アシカ猟の頭領格の人物であったという〔井上一九九四〕。また、写真12

では網でアシカを捕獲している様子が写っている。なお、写真6、7、8、9は、竹島での作業風景である。アシカ猟をおこなっているものか、その他の漁なのかは明確ではないが、船に乗っている人数から判断して、アシカ猟の際の写真の可能性もある。写

7 久見へ来たアシカ

和一三年までは岩場にあふれるほどの頭数がまだいたということも分かる。写真10からもそれはうかがえる。ただし、全体としては、明治のころよりアシカの頭数は相当減少していたと思われる。この時期には、乱獲はしなかったようである。出産の時期にはあまり捕らなかつた、という語りからもそれはうかがえる。



▲写真9 アシカ猟か（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）



▲写真10 岩礁に群れるニホンアシカ（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）

真9に関しては、写真12と類似した網を持っていることなどから、アシカの準備をしているのではないかと考えられる。

先述したように、明治三八年には二八〇〇頭ものアシカを捕獲していたが、昭和初期には捕獲頭数は一〇頭前後となっていた。八幡氏の記憶は、そのことを裏付けている。伊三郎によると、昭

八幡氏は、アシカは隠岐にも来ていたというが、そのアシカを捕ることはなかったという。隠岐へ来たアシカに



▲写真 11 鉄砲の名手 中渡瀬仁助（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）



▲写真 12 アシカ猟（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）

ついでには、八幡氏は以下のように語る。

大昔から、久見にも遊びに来ていた。昭和三〇年初めごろまで来ていた。ときたま海岸に来ていた。朝早く海岸に行くのと、驚いて逃げたこともある。群れではない。たまに沖釣りに行くと、アシカが船のそばに浮き上がったこともあった。夏が終わったころが多かったか。八月末から九月ごろか。ちよつと寒くなるころ。せつかくここまで来たアシカを追い回して捕まえることはなかった。はるばる来たから、かわいそうという感じだった。

竹島ではアシカを捕ってくるが、隠岐に来遊したアシカは捕ることがなかった。頭数が少なかったことと、海岸にいるアシカの捕獲は難しかったという理由もあるという。

さらに、アシカに関して、貴重な語りが出てきた。久見ではアシカとは呼ばなかったという。



▲写真 13 アシカ猟（昭和 9 年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）

アシカのことはメチ、あるいはトドといった。本当のトドはない。トドよりもメチといった。メチが八割ぐらい。中学か高校ぐらいに、アシカと習ったところから、アシカと言いだした。戦後はアシカというようになった。

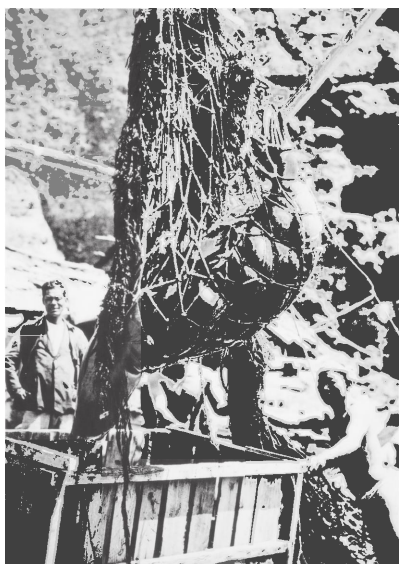
アシカの古語にミチというものがある。同様の呼び名が昭和初期まで隠岐には残っていたことがうかがえる。貴重な証言であるといえよう。

ところで、竹島から捕獲してきたアシカはどのようにしたのであろうか。ここからは、八幡氏自身がアシカとかかわった体験も含まれる。

竹島から帰ってくると、よう帰ってきたということで、船着き場でお神酒を飲んでいた。行くときと同じで、晩に出て朝か昼に着いていた。

アワビは塩漬けして持って帰った。アシカの皮は塩して持って帰る。干せばいい敷き物になる。昭和の初めごろ、毛皮の敷物にしていた。畳の代わりにした。毛が短いので気持ちがいい。座っても感じがいい。今は残っていない。

アシカは竹島で解体して、皮、油を取って持って帰るほうが多かった。五、六頭ぐらい、檻に入れて持って



▲写真 14 生け捕りにされたニホンアシカ（昭和9年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）

帰った。弱ったり、売れそうもないときは、ここで解体した。動物園に売るのは頭数としてははれている。皮は軍隊の背囊として、軍がだいぶん買った。煮て油にしてドラム缶に入れて持って帰った。油はうまいらしい。石鹼にも使った。自分は食べたことはない。赤肉はほんのわずかしかない。あとは脂肉。これは白肉。寒いところでも生息できるようになっている。赤肉は食べる。白肉は脂の塊なのでうまくない。赤肉は塩漬けて少しは持って帰った。ちよつと食べた。臭かった気がする。母親は好きではなかった。臭いといって食わなかった。肉は売らない。塩漬けたのを分けて食べた。部落じゅうもらって食べた。油を取った滓は、肥料にした。

大きなアシカは持って帰って飼っていた。売れそうもないと、殺して分けて食べた。生きているのを持って帰るのは少なかった。箱で積んできた。全部は売っていないと思う。

アシカは生まれて二、三か月までは死亡率が高い。赤ちゃんを持って行っても買ってくれない。でも芸を覚えるのは半年か一年ぐらいまで。しばらく、ここ（久見）の川でアシカの赤ちゃんを箱に入れて飼っていた。しばらくすると、箱から出して、ロープをたすき掛けにして、つないで飼っていた。そのうちに、ロープを噛み切るようになる。一か月ぐらいおると、逃げなかった。当時、この向こうに学校があった。学校から帰ると、魚を釣って、アシカに持って行ってやった。アシカは喜んで食べた。それがおもしろくて、アシカに魚を与えていた。



▲写真 15 ニホンアシカの幼獣の集団（昭和 9 年撮影、個人所蔵、竹島資料室提供）



▲写真 16 アシカの皮（隠岐自然館所蔵）

アシカと遊んでたか、と言った。本家は海岸近くにあった。ほかの子が餌をやると食べるが、帰ってもついては行かなかった。利口なもんだった。

後からついてくるアシカは全部ではない。一年に一頭ぐらいいなく。多いときには二、三頭ぐらい川で飼っていた。そのなかで、なついてくるアシカにしか餌をやらない。なつくと餌もやりたくなるし、なでてやっても喜ぶ。とくになついてるのは、ブーなど、名前をつけていた。売られるときは、涙が出るぐらいいだった。大き

自分と、すぐ隣の同級生のキシロウがよくやっていた。二人が帰ると、後をつけて歩いてくる。ぱたんぱたんといってきた。家の中へ入ると、帰って行った。アシカがついて行くと、母親がまた



▲写真 17 日英博覧会で銀賞受賞のアシカ皮の鞆（中井養三郎作、隠岐自然館所蔵）

なアシカも大きな箱に入れて飼っていた。大きなアシカは長くて一〇日ぐらい。餌もたくさんいるし。子どもが近寄ると、怒られた。アシカに噛まれるから。

夏になって、泳ぐようになると、アシカの首にロープを掛けると、ロープを持つているだけで、さーっと泳いでくれる。沖へ行くと、くるっと回って、そばへ寄ってきて並んで泳ぐ。自分の上に乗ってくれというように、（八幡氏の）下から上がってきた。ロープを放すとそばへ寄ってくる。またロープを持つと、すーっと泳ぐ。本当にかわいいもん。もう一回やってみたい。三、四か月の赤ちゃんだった。自分は一〇歳から一二、三歳ぐらいの

ときだった。泳ぐようになったころ。アシカに助けられながら、一緒に泳いだ。一年ぐらいたつと動物園に売った。三〇〇円、安くても二〇〇円で売れた。村長の給料が七円から一〇円の時きだった。半年以上たつたのでないと買ってくれなかった。一年半過ぎると、覚えが悪くて、高値では買わなかった。

海岸に塚があった。クジラが寄つたことがある。クジラ塚といつていた。長い大きな石が立っていた。何も書いていなかった。港湾施設を作った関係で取った。三〇年より前だった。今は残っていない。子どものころにはあった。古いころに作つたもの。祭りはなかった。冬の寒いところに、漁師が海へ出られないとき、その辺りで焚き火をして飲んでいた。大漁を祈つて一緒に祭りをしていたか。当時は神がたくさんあった。塚も多かった。動物を祀つた塚はほかには知らない。竹島から連れてきたアシカを解体

したとき、骨を塚のところへ埋めた。

実際に体験したことであるため、八幡氏の語りは、より具体的である。昭和初期には、やはり動物園に売却することが大きな目的であったことがうかがえる。写真15ではアシカの赤ちゃんが写っている。赤ちゃんを連れてきていたという八幡氏の語りを裏付ける。幼い八幡氏たちにとっては、アシカに餌をやったり、海で一緒に泳いだ体験はとても楽しいものであったようである。竹島のことを熱っぽく語られるときは異なっており、アシカと遊んだ体験を語る時には、八幡氏はやわらかい表情になっておられた。隠岐の海岸に來遊する野生のアシカではなく、捕獲してきた子どものアシカは、飼っている状態であったため、久見の子どもたちにとっては、親しい遊び相手という感覚であったのであろう。現在、ニホンアシカと直接にかかわった体験を持つ人は、全国的にみても数えるほどしかないであろう。大変貴重な体験である。

おわりに

戦後、島根県よりアシカ猟の許可が出されたが、韓国が竹島の領有権を主張するようになり、昭和二八年（一九五三）を最後に、日本側からはアシカの目撃もなくなった。韓国の漁民もアシカ捕獲をおこなったが、昭和三年（一九五七）を最後にアシカは姿を消したという。動物園に売却されたアシカも、戦争中に死んでしまったという。

ニホンアシカは絶滅したといわれている。アシカに関する直接的な体験をもった方は少なくなっている。人々の記憶からは次第に薄れ、日本に固有のアシカがいたことを知らない人が多くなっている。今こそ、列島各地の断片

的な記憶を掘り起こし、海辺の伝承を語り継いでいく必要がある。

(注)

(1) 隠岐自然館が中心となって、戦前、白島の松島でおこなわれていたアシカ猟の実態調査が実施されたという
 (『ニホンアシカ Q & A』隠岐自然館)。

(2) ウミウ、カワウ、サギなどの糞を採取して、田畑の肥料とした習俗は日本各地に存在した「藤井 二〇一〇」。

(3) 今回の調査では、西ノ島三度の女性も竹島へ渡り、「トド」を捕ったということを聞いた。道前千志氏の祖母で、明治二〇年ごろの生まれの方である。この方は、海士町出身で、三度へ嫁いできたという。

(参考文献)

- 伊藤徹魯・中村一恵 一九九四 「ニホンアシカの復元にむけて 九 ニホンアシカの分布の復元」『海洋と生物』
 一六―五
- 井上貴央・佐藤仁志 一九九三 「隠岐島三度のアシカ猟『隠岐の文化財』一〇
- 井上貴央 一九九四 「ニホンアシカの復元にむけて 八 日本海竹島のニホンアシカ 一 アシカ猟の変遷」『海
 洋と生物』一六―四
- 井上貴央 一九九五 「ニホンアシカの復元にむけて 一一 日本海竹島のニホンアシカ二 捕獲頭数の変遷」『海
 洋と生物』一七―一
- 井上貴央・中村一恵 一九九五 「ニホンアシカの復元にむけて 一三 動物園で飼育されたニホンアシカ」『海洋
 と生物』一七―三

井上貴央・佐藤仁志 一九九六 「ニホンアシカの復元にむけて 一六 ニホンアシカの毛皮および皮の利用」『海洋と生物』一八一—三

坂口一雄 一九八〇 『伊豆諸島民俗考』 未来社

桜田勝徳・山口和雄 一九三五 『隠岐島前漁村採訪記 隠岐調査報告 一』アチックミューゼウム（日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書』二〇 一九七三 に収録）

左古隆 一九八五 「七ツ島の近世胡嬪獵」舳倉島・七ツ島（大島）遺跡群細分布調査報告書」輪島市教育委員会

杉原隆 二〇一〇 『山陰地方の歴史が語る「竹島問題」』私家版

段木一行 一九七六 『伊豆諸島の歴史』武蔵野郷土史刊行会

千葉徳爾 一九七五 「アシカとジュゴン」『水温の研究』一九—五

中村一恵 一九八九 「ニホンアシカ その分布と絶滅をめぐる」『日本の生物』三一—二二

中村一恵 一九九二 「悲劇の海獣 ニホンアシカ」『海洋と生物』一四—三

中村一恵 一九九五 「ニホンアシカの復元にむけて 一四 日本の近・現代におけるアシカ猟とその地理的分布」『海洋と生物』一七—四

中村一恵 一九九七 「ニホンアシカの生息状況 その過去と現在」『国際海洋生物研究所報告』七

西本豊弘 一九九五 「北部日本の遺跡から出土するアシカ類と海獣狩猟」『海洋と生物』一〇—一

野本寛一 一九九五 『海岸環境民俗論』白水社

橋口尚武 一九八八 『島の考古学』東京大学出版会

藤井弘章 二〇一〇 「カワウとつきあう民俗技術 愛知県美浜町上野間・鵜の山の歴史民俗学的考察」『年報村落

前田正明 一九九二 「近世のあしか狩と死あしか取捌きについて ―紀州漁村における役負担の一形態―」『紀州
経済史文化史研究所紀要』一二

南方熊楠 一九二九 「紀州田辺湾の生物」『大阪毎日新聞』昭和四年五月二五日―六月一日（『南方熊楠全集』六、
平凡社、一九七三年に収録）

宮古市教育委員会市史編纂委員会編 一九八一 『宮古市史 漁業・交易』 宮古市
渡部裕 一九九二 「アイヌの海獣猟」『北海道立北方民族博物館研究紀要』一

（付記）

八幡昭三氏からの聞き取りは、二〇一〇年一月三日、四日の二日間にわたっておこなった。このうち、四日の
聞き取りの際には、民俗学研究所員（総合社会学部教授）の戸井田克己氏と一緒に話をうかがった。八幡昭三氏
は現在、黒曜石の加工をおこなっている。仕事の手を止めて長時間話をうかがわせていただいた。また、竹島に関
する貴重な資料も貸していただいた。あらためて八幡昭三氏とそのご家族に感謝申し上げたい。

アシカ全般に関する情報は、隠岐自然館の鳥井光文氏にご教示いただいた。

また、竹島のアシカ猟に関する貴重な写真は、島根県の竹島資料室より提供いただいた。

西ノ島でお話をうかがった方々、資料提供をしてくださった機関、すべての方に感謝申し上げます。